

## パウロの喜び (7)

2008. 3. 4 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

### 引用聖句

ルカの福音書 12章35節から37節

「腰に帯を締め、あかりをともしていなさい。主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。」

ルカの福音書 21章34節から36節

「あなたがたの心が、放蕩や深酒やこの世の煩いのために沈み込んでいるところに、その日がわなのように、突然あなたがたに臨むことのないように、よく気をつけていなさい。その日は、全地の表に住むすべての人に臨むからです。しかし、あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい。」

最後に読まれた箇所は本当に大切です。「しかし、あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらすべてのことからのがれ、人の子の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい」と。

「絶えず目をさまして祈っていなさい」。この呼びかけは、聖書の中で何度も何度も出てきます。信じる者にとって一番大切なことではないでしょうか。

イエス様はいつも祈られたお方です。「油断せずに祈っていなさい」。「イエス様を仰ぎ見なさい」。私たちは確かに時々祈るでしょう。しかし、「私はいつも祈っている」と、言うことはできません。しかしイエス様はおできになったのです。「わたしはいつも祈っている」と。イエス様は、本当に霊とまことをもってお祈りなさいました。深く感じて祈られたのです。ではなぜでしょうか。イエス様は「み父の栄光のために」祈られた、とはっきり言えるからです。「自分は大切ではない。父お一人だけが、栄光をお受けになっていただきたい」。またイエス様は、み父との交わりをお持ちになるためにも祈られたのです。み父との交わりなしには、父のみこころを知ることができませんし、何ごともすることができなとおわかりになっていたからです。

イエス様はみ父との交わりによって、父のみこころを悟るために祈られたのです。イエ

イエス様はこの世に来られる以前に、父のみこころを何でも知っておられました。み父と共に  
おられる時には、お祈りなさる必要はなかったのです。しかし、ご自分が人間となられる  
ことによって、「わたしは何を話したら良いかわかりませんので、父から聞いたことばだけ、  
また祈りを通して聞いたことばだけを宣べ伝えます」と言い続けられたのです。イエス様  
は、人々に主なる神の力と贈り物を与えるため、つまり「人間を富む者とするため」に祈  
られたのです。

イエス様の祈りについて、ヘブル書の著者は次のように書きました。

ヘブル人への手紙 5章7節

キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に  
向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえ  
に聞き入れられました。

イエス様は「大きな叫び声と涙とをもって祈られた」と記されています。イエス様は、  
しばしば、おひとりで荒野、寂しい場所、また山などに行かれました。このような所では、  
もはや世の中のざわめきを聞かず、誰からも邪魔をされず、ご自分の心をみ父の御前にそ  
そぎ出すことがおできになったのです。イエス様の最高の喜びは、み父とお話しになるこ  
とでした。イエス様は、あらゆる闘い、あらゆる困難の中でも、いつも喜びに溢れておい  
でになりました。絶え間ないみ父との交わりこそが、イエス様の休息そのものだったでし  
ょう。しかしイエス様は、何か大切なことを決する場合大胆に祈られました。例えば、使  
徒たちを選ぶ時に、イエス様は夜通し祈られました。ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、あの弟子  
たちだったらいいだろうと思って。イエス様は、ユダがしばらくの間は一緒にいるよう  
に見えてはいるが、やがてわたしを裏切るようになる、と初めからわかっておいでになり  
ました。(辛い!…)けれどもユダのことをも、ヤコブ、マタイ、ヨハネ、ペテロたちと同  
じように愛されたのです。イエス様は平等に愛されたのです。ですから、彼をご自分の弟  
子にするために夜通し祈られたのは、無理もなかったでしょう。

イエス様は、ご自分のたましいがみ父のうちに完全な休息を得るまで、安らぎを得るま  
で祈り続けられました。このような祈りの後で、イエス様は勝利を確信して行動なさるこ  
とができたのです。イエス様は、悩むことも、耐え忍ぶことも、重荷を負うこともおでき  
になったのです。イエス様は父のみこころを行ないたいと切に望まれましたし、また、行  
なうことがおできになったのです。

このイエス様は、その当時祈られただけではなく、今日も祈っておられます。イエス様  
は、私たちの罪のために十字架に釘付けされただけで終わることなく、今日も生きておら  
れ、とりなしていただくお方です。十字架の上で「すべてが終わった」と叫ばれたの  
みでなく、近いうちに再び私たちを迎えに来られるお方です。

イエス様はどのようなお方だったのでしょうか。絶えず祈られたお方です。多くの人は確かに祈ります。けれど、大部分は一時的な問題の解決のためにだけ祈っているのです。これは問題です。しかし、イエス様は人間の思うように動かれる方ではありません。もしイエス様が人間の思うように動かれるなら、人間はもっともっと墮落し、もっとわがままになるのではないのでしょうか。

祈らない。心から祈らないことは、結局みじめな姿です。憐れむべき存在です。もちろん、祈らないと喜びもありませんし、実を結ぶこともありません。ですから、使徒たちは、「みんな心をあわせて、絶えず目をさまして祈るように」と言ったのです。

目をさましているために、どうしても祈ることが必要です。そして祈るということは、主と一つになることです。それはイエス様との出会いによって罪を赦された者だけの特権です。ですから私たちがイエス様を体験的に知ったかどうかということが、決定的な要素になるのです。私たちは罪の中に死んでいるのでしょうか。それとも目をさまして祈っているのでしょうか。私たちはみな、永遠のいのちをもっているのでしょうか。御霊によって新しく造られた者なのでしょうか。

「救い」とは何でしょう。聖霊の宮になることです。教会の会員になることでもありません。水のバプテスマを受けることでもありません。聖書の内容を知り、信じ込むことでもありません。

ですからパウロは、テサロニケの兄弟姉妹に書いたとき、そのことを強調しました。  
テサロニケ人への手紙・第一 4章8節

**ですから、このことを拒む者は、人を拒むのではなく、あなたがたに聖霊をお与えになる神を拒むのです。**

「主があなたがたに聖霊を与えられた。それによってあなたがたは救われた」とパウロは彼らに書いたのです。よく知られているローマ書8章9節にも、同じ事実について書かれています。ここでは「聖霊」という言葉よりも、「御霊」「キリストの御霊」という表現が使われています。

ローマ人への手紙 8章9節

**けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中ではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。**

すなわち、キリストの御霊をもっていないなら、救われていない。たとえローマの法皇であったとしてもだめ。聖霊の宮になることこそ大切なのです。コリント第一の手紙3章16節を読むと、ここでも神の御霊という表現が出てきます。ご存じのように、コリントの教会はあまり模範的な教会ではなかったのです。パウロの絶えざる悩みの種でした。け

れどそれと関係なく、次のように書くことができたのです。

コリント人への手紙・第一 3章16節

あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。

それとも忘れたのでしょうか。いったいどういうことですか、と。

6章19節に、同じ事実について書かれています。

コリント人への手紙・第一 6章19節、20節

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

救いを得ることとは、「御霊の住まい」「神の住まい」となることです。

テサロニケ4章は、二つに分けて考えることができます。

- ・ 1節から12節までは、信じる者の聖めについて。
- ・ 13節から18節までは、信じる者の希望について。

もちろん、「聖め」と「望み」とは密接に結びついているので、本当は切り離すことはできません。例えば、ヨハネ第一の手紙3章2節と3節を読むと次のように書かれています。

ヨハネの手紙・第一 3章2節、3節

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。

そのうちそのようになるかもしれない、ではありません。私たちは今すでに神の子どもです。「キリストに似た者となることがわかっています」というみことばについて、原語を見ると、「確信する」となっています。

すなわちテサロニケ人への手紙は、「聖め」または聖化を呼び起こす手紙であり、また、希望を与える手紙です。今話しましたように、もちろん「聖め」と「希望」とはお互いに密接な関係を持っていますが、イエス様が再び来られるという希望こそ、「聖め」或いは「聖化」を押し進める最も強い推進力なのです。

イエス様の現われを心から待ち望んでいる兄弟姉妹は、絶えず罪から聖められたいという強い願いを持っています。ですからパウロは書いたのです。

テサロニケ人への手紙・第一 4章1節

終わりに、兄弟たちよ。主イエスにあって、お願いし、また勧告します。あなたがたはどのように歩んで神を喜ばすべきかを私たちから学んだように、また、事実いまあなたがたが歩んでいるように、ますますそのように歩んでください。

では「どのように歩んで神を喜ばすべきか」、これこそが大切です。

テサロニケ人への手紙・第一 4章2節から12節

私たちが、主イエスによって、どんな命令をあなたがたに授けたかを、あなたがたは知っています。神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。あなたがたが不品行を避け、各自わきまえて、自分のからだを、聖く、また尊く保ち、神を知らない異邦人のように情欲におぼれず、また、このようなことで、兄弟を踏みつけたり、欺いたりしないことです。なぜなら、主はこれらすべてのことについて正しくさばかれるからです。これは、私たちが前もってあなたがたに話し、きびしく警告しておいたところです。神が私たちに召されたのは、汚れを行なわせるためではなく、聖潔を得させるためです。ですから、このことを拒む者は、人を拒むのではなく、あなたがたに聖霊をお与えになる神を拒むのです。兄弟愛については、何も書き送る必要がありません。あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちだからです。実にマケドニヤ全土のすべての兄弟たちに対して、あなたがたはそれを実行しています。しかし、兄弟たち。あなた方にお勧めします。どうか、さらにますますそうであってください。また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をするを志し、自分の仕事に身を入れ、自分の手で働きなさい。外の人々に対してもりっぱにふるまうことができ、また乏しいことがないようにするためです。

この箇所には、テサロニケに住んでいる兄弟姉妹の古い性質のことが記されています。当時テサロニケは非常に豊かな商業都市でした。ですから金銭に対する欲望が渦を巻き、道徳的にもずいぶん堕落していました。信者とはいえこのような悪い影響から免れることは、簡単なことではなかったのです。このような理由から、パウロはテサロニケにいる兄弟姉妹にきびしく警告し、不品行を避け、兄弟を踏みつけたり欺いたりしないように、と言ったのです。救われた者とはいえ絶えず目をさましていないと、不品行に陥り、金銭に対して貪欲になる、とパウロは警告しました。肉の思いと欲に耽ること、或いは金銭に対して貪欲になることは、イエス様を心から待ち望むこととは全く相容れないものです。

この問題と関連して、「聖め」、或いは「聖化」と呼ばれる問題が起こってきます。

三つの質問をしましょう。

第一番目。聖めとは、いったい何でしょうか。

第二番目。新しい生活の力とは、いったい何でしょうか。

第三番目。聖霊に満たされるとは、いったい何でしょうか。

\*第一番目。聖めとは、いったい何でしょうか。

この問いに対する答は、今読みました4章7節、8節を見ると、見出すことができます。  
テサロニケ人への手紙・第一 4章7節、8節

神が私たちが召されたのは、汚れを行なわせるためではなく、聖潔を得させるためです。ですから、このことを拒む者は、人を拒むのではなく、あなたがたに聖霊をお与えになる神を拒むのです。

と。「聖め」とは、実際にはどのように見えるものでしょうか。9節には兄弟に対する態度、すなわち兄弟愛について記されています。

テサロニケ人への手紙・第一 4章9節

兄弟愛については、何も書き送る必要がありません。あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちだからです。

そして11節、12節を読むと、大部分の人たちすなわち未信者に対する態度として、「自分の仕事に身を入れること」について記されています。

テサロニケ人への手紙・第一 4章11節、12節

また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をすることを志し、自分の仕事に身を入れ、自分の手で働きなさい。外の人々に対してもりっぱにふるまうことができ、また乏しいことがないようにするためです。

別の言葉で言えば、汚れた肉の欲ではなく聖い兄弟愛を持ち、貪欲な守銭奴ではなく勤勉な働き人であるようにと勧められています。

兄弟愛は、決して私たちの努力によるものではなく、上から与えられる賜物です。もともと人間は自分のことばかり考えて、他の人のことを考えない性質を持っています。テサロニケの兄弟姉妹は、主のからだなる教会、すなわち一つの組織としてではなく有機体として、地方に住んでいる兄弟姉妹とも心からの一致があり、麗しい兄弟愛を持っていたのです。けれどそれと同時に、彼らも、肉の欲に溺れる危険性に直面していました。汚れた欲のとりこになるか、或いは聖い兄弟愛を持つかのどちらかという二者択一の問題に直面していたのです。御霊が私たちに満たし、導くことができるか否か、という非常に大切な問題が存在していたわけです。イエス様のからだなる教会は怠け者が入る余地はない、とはっきりパウロは言い切っています。信じる者が自分の仕事に身を入れ一生懸命に働くということと、心から主イエス様を証ししたいと切望することとは、切り離すことのできない関係にあります。

\*第二番目。新しい生活の力とは、何でしょうか。

パウロが書いているような新しい生活の力とはいったいどういうものかという問いが、

これとの関連において別のものとして現われてくるのではないかと思うのです。つまり、要約すると、聖い生活をするためには聖いお方が必要である、ということです。

この聖い人格者とは、ただ聖霊によってのみ可能となるのです。この世には、人間の力で聖い心を持ち、聖い生活をする事ができる、と考えている人々が数えきれないほどいます。多かれ少なかれ、未信者は誰でもそのように考えているのではないのでしょうか。頑張れば何とかなる。けれど彼らは自分自身の本当の姿に対しては全く盲目であり、彼らは聖なる主に対してはほとんど注意しないのです。イエス様を体験的に知らなければ、人間は誰でも、自分自身のエゴ、つまり悪魔のとりこになっているのです。この事実を知らないこと、また知りたいと思わないことこそが最大の悲劇です。

生まれつきの人間は、「罪を犯すこと」しかできないのです。これこそ主のご判断です。聖い生活は、ただ「聖い御霊」すなわち聖霊のみが、導き、営み得ることなのです。ですから、イエス様のご再臨に対して聖霊を受け入れて、「聖霊の導きに従うか否か」ということのみが大切な選択となります。

私たちは「御霊」「聖霊の働き」に対して、どのような態度をとるべきでしょうか。

三つの異なった態度をとることができるのです。

・第一の態度は、聖霊を全く無視する態度です。

救われた者ならば誰でも、聖霊の宮である、神の住まいである、とあります。けれども私たちは、聖霊の「宮」であるか、または「牢屋」にしているか、のどちらかではないでしょうか。多くの信者がみことばに正しく向かい、聖霊の働きと導きに正しく従うことをしていません。つまり実際問題としては、自分が決定権を持ち、聖霊は全く無視されています。「主よ、私はどうしたらいいのですか。教えてください。導いてください」。そういう心構えがないからです。

・二番目の態度は、聖霊を部分的に受け入れるということです。

言葉を変えて言うならば、聖霊が信じる者の「全支配権」を持つのではなく、「部分的な支配権」を持つ、ということです。そのような場合には、聖霊は単なる「お客様」としてよそよそしく取り扱われているのです。おもに自分が支配し、決定し、時々みこころは何か、と尋ねるに過ぎないような信者が少なくありません。そのような生活の結果は、決して祝福された生活ではなく、むしろみじめな生活です。

・三番目の態度は、すべてを聖霊に明け渡し、「御霊がすべての支配権を持つ」という態度です。

パウロが聖霊に対してとった態度は、まさにこの三番目の態度でした。その結果はご存じのように、「生きているのはもはや私ではなく、キリストである」という告白です。

\*最後に第三番目。聖霊に満たされるとは、いったい何でしょうか。

それはどのようにして可能となるのでしょうか。答は三つです。

- ・第一番目、全く献身することによって、
- ・二番目、主が全く支配権をとってくださることに対して感謝することによって、
- ・三番目、主が導いてくださり、ご自分の栄光を現わしてくださることを心から期待することによって、

聖霊が私たちに満たし導くことが可能なのです。

絶えずおぼえるべきことは、聖霊に満たされることは感情の問題ではありません。意志の問題です。すべてを主に明け渡したときに初めて、私たちは聖霊に満たされます。

ですから、聖霊に満たされるための前提条件は、第一に献身。第二に、主が支配権をお持ちくださったという確信にほかなりません。そしてこれは私たちの「決断」にかかっているのです。私たちは聖霊に満たされるまで待つ必要はありません。私たちが心を開いてすべてをイエス様に明け渡しさえすれば、満たすことを常に望んでいる聖霊は直ちに私たちに満たしてくださるのです。

この聖霊の働きの「結果」とは、また聖霊の「実」とは、何でしょうか。ガラテヤ書5章を読むと次のように書かれています。

ガラテヤ人への手紙 5章22節、23節前半

**しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。**

もし聖霊だけがご支配なさることができれば、御霊の実は啓示されるのです。これは決して敬虔ぶった宗教家、或いは宗教的な人の努力の結果ではなく、まさに「御霊の実」です。御霊は、私たちが過去に犯した罪だけでなく、罪そのものの本当の恐ろしさをも明らかに示してくださるのです。そして罪は私たちの内に宿っています。御霊は、イエス様による罪の贖い、或いは救いが、私たちにとってますます本当のものとなり、ますます深くなるように導き助けてくださるのです。

テサロニケの兄弟姉妹は、「イエス様は再び来られる」という喜ばしい訪れを聞きました。それは情報或いはニュースだけでなく、「再臨に対する用意ができているか否か」という呼びかけでもあったのです。私たちにとっても、イエス様のご再臨なさるという「真理」は、まさに聖めに対する呼びかけです。「キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが聖くあられるように、自分を聖くする」とあります。

私たちは聖霊に対してどのような態度をとるのでしょうか。

- ・全く無視するのでしょうか。
- ・一部だけ支配権を明け渡すのでしょうか。
- ・或いは全支配権をイエス様に明け渡すのでしょうか。



最後にもう一度考えましょう。

- ・私たちが聖霊に満たされるためには何をしたら良いのでしょうか。
- ・御霊に満たされた生活の秘訣とはいったい何でしょう。

私たちの主イエス様は絶えず御霊に満たされておいでになりました。このイエス様は父のみこころに完全に従われました。「わたしの思いではなく、あなたのみこころだけがなるように」とイエス様は毎日心から祈られたのです。

イエス様は、父の御手の中にあり、従順な器でした。その態度は常に次のようなものでした。「お父様、わたしはここにいます。どうかあなたのご自由になさってください。この地上ではただただ、あなたのみこころだけが行われますように、わたしは何でもいたします」。イエス様がこの態度をおとりになられたので、聖霊は導くことができ、イエス様の御栄光を現わすことがおできになったのです。

祈りこそ、聖霊に満たされるための前提条件です。五旬節のとき、百二十人の兄弟姉妹が祈っている間に聖霊がそそがれたのです。その少し後で、祈りの答として弟子たちが新しく聖霊に満たされた、と使徒行伝に書かれています。

私たちが聖霊に満たされたいと願うならば、私たちの人生はすべてイエス様に明け渡されなければなりません。また、イエス様のみこころだけを行なうということが私たちの願いとならなければなりません。そしてまた私たちの祈りは、「主よ、私はただあなたの名誉だけを望みます」というものでなければなりません。イエス様の切なる願いはいつも同じものでした、「わたしはここにいます、お父様、どうかあなたのみこころだけがわたしを通して行なわれますように」と。

主イエス様は、私たちに次のように言われます。

「父がわたしを遣わしたように、わたしはあなたがたを遣わします。父はわたしを遣わしましたが、父はわたしをひとりにさせず、聖霊がわたしの上に臨み、わたしの中にとどまりました。わたしを通して父は聖霊の力によって贖いのみわざを成就してくださいました。そして今わたしはあなたがたを遣わします。誰でも罪の赦し、神との平和、永遠のいのちをただでいただくことができます」と。

また、「わたしはあなたがたをひとりでは行かせません」。「わたしにあなたがたの人生の全支配権を与えなさい。そうすればわたしはあなたがたを用いることができます。わたしの霊があなたがたを満たし、器として用いるようになります」と。

「聖霊に満たされること」また「主イエス様の御手にある器となること」、これに勝る大きな祝福は何一つありません。

了